

婦人と子ども

第二卷第一號

(明治三十五年一月五日)



(本欄は凡て
轉載を禁ず)

黒子太郎 (ついで)

やまとの翁

さて其日そのひもくれて、夕方ゆゑがたになりますと、どこからとなく鬼おにの大將たいしやうが、ふいと戻もどって來きました。そしてそこいらを嗅かぎ廻まわして見たみた「あゝ、人臭ひとくさい、人臭ひとくさいこれわ變へんだ」といってしきりに隅々すみすみを探さがし始めはじま

した。けれども何も見付けだす事ができない。すると鬼の婆さんが態と怒った顔附をして。

「驚何だつて此人わ、折角私が片付けて置いたのをこんな引き散らすのだもの、お前の鼻の尖にわ、何時でも人間の肉が、くつついてるのだと見えるよ。

まーそこえ坐つて夕御飯でもお上りよ」

そこで鬼の大將わ夕飯を喰べて、夫がすむとだんく眠たくなって来ました。それでお婆さんわ大將の大きな頭を自分の膝の上え載せさせてちよいと髪を解きつけてやるトといいます。大將わいー心

地ちになつて 婆ばいさんの膝ひざを枕まくらにして こくりく眠ねむ
りかけました。 婆ばいさんわ とくと夫それを見て 突いき然なり大たい
將しやうの頭うたまから 一ほん本の金きんの毛けを引ひき抜ぬいて 自じ分ぶんの側そば
え置おきました。

大將たいしやうあ痛いた！ 何なにをするのだらう？

婆ばい私わたしわねー 今いま何なんだか變へんな夢ゆめを見みたのだよ それ
で お前まへさんの髪かみの毛け一ほん本引ひき抜ぬいたのさ』

大將たいしやうフーン どんな夢ゆめを見みたとゆーのだえ』

婆ばいまーお聞ききよ。 ある町まちにねー お酒さけの涌わきでる
河かわがあつた所ところが いつからとなく、 とまつてしまつ

て、今でわ水一滴も流れてこない様になつたとゆー
 のだが、一体どーした譯だろー お前知ってるなら
 いったて見てくれないかえ』

大將「ばー夫かい 夫わこーなのさ 一疋の蛙が河の
 石の下に座って居るのだ。だから誰でも 其蛙を殺
 してしまひさえすれば もとの通りにお酒が涌き出
 るとゆー譯なのだ』

そこで鬼の婆さんわ 又以前の通り 大將の頭を
 解き付けて居ます。心地がよいもんだから 大將わ
 又眠り始めて 其窟の大きなことゝいったら 丸で

お座敷中の障子などが　ふるくと動き出した位で
 す。夫を見すまして　婆さんわ　突然又二本目の髪
 毛をひきぬきました。鬼わ不圖目を睜まして

大將「えー　うるさいなー　何をするのだ」

婆「まーそー怒んなさんな　私わ夢を見てしたのだ
 もの」

大將「こんどわ　どんな夢を見たの？」

婆「こんどのわ妙なのよ　ある賑な町にねー　大き

な林檎の樹があつて　始わ黄金の實がなつていたの
 が　近頃わ葉一枚も出ないとゆーのだが　何故だろ

「かねー」

大將「ふーん 木の根の處に 鼠が居って齧ってるの

だよ 鼠さんに殺してしまえば 又々黄金の實がなる

のさ 殺さんければ枯れてしまふまで 鼠が齧って

居る譯なのだ。けれども まーくゆっくりねさせ

て呉れ でないと今度邪魔すると婆さんだといつて

聞かないよ」

所で婆さんわ 又前の通り大將を寝かせながら

又不意に三本目の毛を抜いた。そこで今度わ 大將

ひどく怒っていきなり立ち上って 婆さんを抛り

附つけよーとしかけたのでしたが 婆ばさんわ まーく

といつて之これを宥なだめて

婆ばだってお前まへの外ほかに 誰たれが夢ゆめを解といてくれるもの

かい『?』

大將たいしやうも やっぱり其夢そのゆめを知しりたいものだから

大將たいしやうじやー こんどの夢ゆめわ『?』

婆ばまー こーだよ 一ひとり人の渡わたし守もりが居ゐって ど

ーゆー譯わけか 年ねんから年ねん中ちゆう 向むかの岸きしから こっちの岸きし

に 往いつたり來きたりして居ゐって どーしても離はなれる

ことが出で來きないとゆーのだが 一たい体たいどーしたらいー

のだろーと云ー譯さ『

大將^{だいしょう}「なんだ馬鹿^{ばか}なこと

誰^{だれ}か一人^{ひとり}其處^{そこ}を渡^{わた}る人^{ひと}が

あつた時^{とき}に 渡^{わた}し守^もりが 楫^{かい}を其^{その}人^{ひと}の手^てに 渡^{わた}して

しまいさねすれば こんどからわ其人^{そのひと}が あつちね

行き こつちね行きせねばならぬ様^{よう}になつて 渡^{わた}し

守^もりわ すぐ助^{すけ}かるとゆー譯^{わけ}なんだ』

そこで婆^{ばい}さんわ 黒子^{くろこ}太郎^{たろう}の爲^{ため}に 三本^{さんぼん}の金^{きん}の毛^け

を抜^ぬいて仕舞^{しま}つたし 又^{また}三^{みつ}つの事^{こと}の答^{こたえ}も大將^{だいしょう}から

聞^きいたもんですから 今度^{こんど}わ じつと大將^{だいしょう}を寢^ねかせ

ました。 夫^{それ}で大將^{だいしょう}わ 何^{なん}も知^しらないで ぐつと朝^{あさ}ま

で 寝こんでしまいました。

借夜が明けるとゆーと例の様に大將わ どこにか
出懸てしまったので婆さんわ さっそく 着物のす
そから蟻をつまみだして 又もとの人の形に取り代
ねました。

婆そら 黒子太郎や こゝにお前の欲しかった大
將の金の毛が 三本出来ましたよ 夫から あの三
つの譯とゆーのわ 丁度お前もきーて居ったろー」

太郎「あー よく聞いて居ました 危い所をお助け下
さって 其上私の望を みんな叶へて下さった御恩

は 決して忘れわ致しません

それで黒子太郎 婆さんに大變禮をいって彼の
 三本の金の毛を 錦の袋に丁寧に仕舞って 大事に
 大事に懐に入れ さて鬼の棲家を立出て 何事も
 都合よく甘く行けば行くものだなー など、考にな
 から 大勇で以て 又元の道を通って お城に目出
 たく歸ろーとゆーのですが 夫から途中でどんなこと
 があるか お城に歸ってから後がどーなるのか そ
 れわこの次のお樂にしまっておきましたよー (うぐ)